

多紀元簡と「蝦夷地異疾考」

松木明知

1.

多紀氏が江戸幕府医学館である躋寿館を主宰し、それが江戸時代の漢方医らの主流をなしていたことは、森潤三郎の「多紀氏の事蹟」や森鷗外の史伝「渋江抽斎」などによっても広く知られている。

さて文化年間に入って日露間の外交関係が険悪になるや、幕府は蝦夷地の警備を東北諸藩に命じ、諸藩はまた蝦夷地の各所に陣屋を建設し、越冬兵を派遣したことは既に拙著に述べた通りである。

しかし諸藩の越冬兵、中でも津軽・南部藩の諸兵士に壞血病が多発し、病死する者が続発した。詳細な人数は知られていないが、文化年間だけでも一千人以上の越冬兵たちが壞血病に罹患し、このうち少なくとも五百人以上が病死したのである。

このため蝦夷地の警備とくに国後、択捉（エトロフ）、宗谷、斜里など所謂奥蝦夷地やそれに近接する地域の警固の是非と、病死者の多発が一大社会問題となり、幕府はその対策に苦慮した。

政策的には、これらの地域での越冬警備を中止して、冬期には引き揚げを命じたが、医療行政的には仲々有効な対策が講じられなかった。

当時、越冬兵が罹患した「浮腫病（はれやまい）」の本態は皆目不明で、酷寒の風土と陰湿な土地がその主なる病因と喧

伝えられた。

そのまま放置しておけば諸藩の兵士の動搖も大きく、ひいては幕府の北方問題の政策にも大きな影響を及ぼすため、幕府は二人の医師に医学的調査を命じ原因の究明に乗り出し問題の解決に当らうとした。

一人は大槻玄沢で西洋医学を代表する医師であり、もう一人は前述した医学館の多紀元簡（もとやす）で、漢方医学の代表者であった。彼は元徳の子で安長と称した。元徳は寛政二年（一七九〇）躋寿館を医学館に発展させた。元簡は文化七年に歿しているから、本書はその死の二年前の著である。

玄沢の調査の結果は、浮腫病の本態は壞血病であるとし、「寒地病案」という一書でまとめられた。このことについては前著「津軽の医史」の中でも少し言及した。

一方多紀元簡の調査結果は、文化五年「蝦夷地異疾考」という一書にまとめられて幕府に報告された。

本書は現在東京大学図書館に架蔵されており、東京大学医学部の皮膚科の教授であり、医史学者として令名を馳せた顎

文化五戊辰歲九月六日

植村駿河守殿上

外聞叟書面一丹添

軒土肥慶蔵博士の旧蔵本である。

本書は十五頁の小冊子で、表紙の右上に「文化五戊辰歲九月六日植村駿河守殿江上ル外ニ閑叟書面一丹添」とあり、左には「蝦夷地異疾考」と記されている。

2.

本書の冒頭に次の如く記されている。

蝦夷地異疾考

新閑叟差上候書面熟覽仕、蝦夷地異病治術之義得と相考、私存寄申上候様被仰渡奉得意候、然る處右異病之義、兼而伝聞仕候迄ニ而、親ク治療不仕義故、工夫茂付

兼候得共、唐土医書中テも沙汰有之候疾ニ御座候へ者、右之書も相考猶又閑叟ニも面談仕書面外ニ茂承り、且兼而少々承及候義杯彼是突合せ愚考之趣左ニ奉申上候

(読点筆者)

新築閑叟はエトロフ場所に越冬した経験をも有する箱館奉行付の医師である。愛松軒と称して俳句もよくした。

この前文によって元簡が新築閑叟から書簡を受け、その上直接面談して蝦夷地の奇病についての情報を得、中国の医書をも参照して、彼の意見を幕府に提出したことが理解されるのである。

当時植村駿河守は若年寄で、これより前の文化二年十二月十五日に就任していた。

本文は十一節より成っているが、その大意は次の通りである。

この奇病の症状は明時代の医書「医林集要」とか清の「医宗金鑑」に記載されている「青腿下(牙)疔」の症状と同様で、口中は腐爛し歯牙は欠け大腿は腫脹して硬くなり、青や紫黒の茄子色のような斑点が出て、歩行は困難となり遂に死亡するに至る。

この蝦夷地の奇病の症状は、脚気と水腫と痛風と合せたようなもので、これに歯牙が脱落してしまう点まで一致している。

蝦夷地では身分の区別なく浮腫病に罹る。蝦夷地では冬分雪のため夜具など非常に湿気が強く、これも誘因の一つであろう。

箱館奉行付の医師吉野藤内の経験では、瀉下剤が有効であった。土茯苓は蝦夷地会所の番人も珍重しているが、効果が大である。

元簡の弟子、石田春澤が蝦夷地で本病に附子肉桂を用いたが効なく、六味解毒剤に茯苓を混じたところ全快した。

閑叟の経験では烏犀角も著効があるという。

一般にこの病は他国から蝦夷地に来て越年する人に多く発生し、住み馴れた人や夷人には発しない。他国の人は魚肉を多く摂取する。魚肉類は熱を産生し、厚着をするためうつ熱して口中が腐爛するのである。

前述した茯苓、烏犀角の他に、紫雪、碧雪、万病解毒丸が有効である。

さらに「医宗金鑑」中に馬の脳を酒中に入れて服用して効験あらたかであったのである。蝦夷地には野馬も多くいると聞いているので試みて見てもよいであろう。

3.

右の元簡の記載に従えば、蝦夷地の奇病浮腫病は支那の医書に見られる「青腿牙疳」と同一であるとしている。この点は大槻支澤の考えと全く同じである。「青腿牙疳」は現在の壊血病と同じであるとしてもよい。すなわち診断は蘭方医、漢方医共一致したのである。

ところが治療法になると漢方は全く蘭方の比ではなかった。

西欧では長期の航海で多発した壊血病に対して早くから対策が採られてきた。大槻支澤は「寒地病案」の中で、船舶衛生の書である「海上備要方」を引用し、新鮮な果物を推奨している。壊血病はビタミンC欠乏によるのであるから、これは根本治療でもある。

ところが多紀元簡は利尿剤として水腫に有効な茯苓、解熱剤としての烏犀角、紫雪、碧雪を投与することを奨め、また解毒剤としての万病解毒丸を挙げ、生鮮な果物野菜を示していないのは仕方ないことであろう。すなわち対症療法的であった。

しかし津軽藩の山崎半蔵は医者ではなかったが、数年にわたっての蝦夷地での越冬の経験から、本病には生大根が最も

効き目があるとその日記に記しているのは、経験からとはいえ蓋し慧眼である。

4.

いずれにせよ、蝦夷地警管規模の縮小や、玄澤、元簡さらには各藩の医師などによる啓蒙によって徐々に本症が姿を消し、文政年度以降には散発的発生しか見られなくなった。

安政などの幕末に至っても、なお蝦夷地では浮腫病予防のため、大槻玄澤らの推奨する生野菜らと同様に、多紀元簡らの推奨する葉剤も用いられていることからすれば、この書の内容が各藩医に伝えられ、実地に応用されたことは間違いではなからう。

なお本稿の主旨は昭和四十五年の第七十一回日本医史学総会で発表した。

参考文献

- 多紀元簡（安長） 蝦夷地異疾考 文化五年 東京大学図書館蔵
- 大槻玄澤 寒地病案（臥牛医案の中） 文化五年 京都大学図書館蔵
- 山崎半蔵 宗谷詰合山崎半蔵日誌入 市立函館図書館蔵
- 松木明知 蝦夷地における所謂水腫病 津軽医史所収 津軽書房 昭和四十六年
- 松木明知 北海道疾病史 北海道の医史所収 津軽書房 昭和四十八年

Motoyasu Taki and his “Yezo-chi Ishitsu Ko”

by

Akitomo MATSUKI

During a period of Bunka from 1807 to 1808, the diplomatic relationship between Japan and Russia became serious because of the Japanese refusal to trade with Russia.

The Tokugawa shogunate dispatched many soldiers for defence against Russian invasion of Japan, especially in the northern part of Japan, the Yezo area.

However, scurvy prevailed among the soldiers who were dispatched to the Yezo area.

The Shogunate asked Motoyasu Taki who was the director of Seiju-Kan Medical School to investigate the cause and treatment of scurvy.

In response to this, he wrote a short report entitled “Yezochi-ishitsu Ko” (Strange disease in the Yezo area) describing the nomenclatures, causes, case reports and treatment of the disease.

The original document has been in the Doi Library of Tokyo University.